

—絶滅危惧植物を育てる—

ミズワラビ

高橋 務

ミズワラビは、水湿地、水田など浅い水中に生える水性のシダ植物、シダとしては例外的な一年生。世界の熱帯から暖温帯に広く分布し、日本では本州中南部（新潟県と茨城県以西）、四国、九州に分布、新潟県内では聖籠町（北限）、新潟市、巻町、吉田町、越路町、大潟町の報告がある。

私がミズワラビを初めて見たのは、1987年に新潟市鳥屋野潟の植物調査に参加した時で、鳥屋野潟の周辺の水田、休耕田の3箇所に見つかったもので、鳥屋野潟の植物の中で稀少種とされた。

二度目にミズワラビを見たのは、1998年、田上町土場で、草丈10cmにも達しない目立たないものに気付いたのは、以前に見たことがあったためであるが、生育環境はスギ林の山裾に造成された圃地の人工の池の縁で、生育環境としては全く違っていた。

1999年以降、田上町土場のミズワラビ自生地には、何度も足を運ぶが、生育場所は周辺から栽植されたシバが増殖して狭まり、スギナ、コアゼテンツキ、ヒメクグなどが生じ、ミズワラビの発生はみられなくなった。

ミズワラビの新産地が、見つかったのに、すぐに消滅してしまっただけで、なぜこんな所に生じたのか疑問が残り、周辺に生育地があるのではないかと、同じ谷筋（羽生田川沿い）の数年前まで耕作していた水田跡を探してみたが見つからなかった。

私は、水性のシダ数種を栽培している。ミズワラビは、水性のシダ、一年生のシダ、北限のシダ、準絶滅危惧のシダという特色をもったものなので、ぜひ育ててみたいと思い、田上町土場で見つけた時に、1~2本採取し、水湿を保てるようにした鉢に植えておいたが、翌年に発生しなかった。

2000年秋には、ミズワラビを初めて見た新潟市鳥屋野潟周辺の自生地の現状を再認識し、できればミズワラビを育てるために親株を入手したいと考えていた。

ところが、たまたま手元に届いた「植物地理・分類研究 Vol. 48. No. 1.」に掲載されていた報告文「杉本・佐藤・鳴橋：富山県ではびこるミズワラビ」は驚かされる内容であった。ミズワラビは、各地のレッドデータブックで取り上げられ、富山県で絶滅危惧とランクづけられているが、富山県内の山間部の村を除く市町村 170箇所で見つかったとの報告で、ミズワラビは本当に減ってきているのであろうかと疑問視し、水田生育環境の変化や除草剤耐性など考慮し、ミズワ

ラビは殖えているのかもしれない、としているのである。一読して、新潟平野も同じような状況ではないかと思い、早々に近くの水田に行ってみた、驚いたことに、最初に入った水田にミズワラビが見つかった。翌日、2箇所の水田を見て歩いたら、1箇所には多くの個体数が見つかった。その後、坪谷富男さんと加茂市の水田2箇所見て歩いた、結果としては、時期的に遅く、見て歩いた範囲も限られていて、田上町の2箇所以外には見つからなかった。

ミズワラビの生育している水田は、乾田化されているが、トラクター、コンバインの轍の水溜り状の所で、生育は良好で、個体数多く、草丈（孢子葉）は10cmを超えるものもあった。

杉本・佐藤・鳴橋（2000）が、ミズワラビについて富山平野で指摘したことは、新潟平野にもあてはまると思われる。新潟平野においては、ミズワラビの分布は海岸部の低湿地とされているが、水田は植物調査の盲点で、沿岸地方の水田地帯に注目すれば、広い範囲に分布が見られるのではないだろうか。

ミズワラビが新潟平野に殖えているということになれば、レッドデータブックから除かれることになるであろうし、絶滅危惧植物を育てるという意味もなくなるが、ミズワラビがなぜ殖えたのかという新たな問題が提起されたことになる。

なにはともあれ、ミズワラビを育てる親株、一年生の水性シダの生活史を観察することの材料が簡単に得ることができるようになったことを喜んでいる。

(2001. 1. 10. 記)



写真1 田上町羽生田の水田に生育するミズワラビ

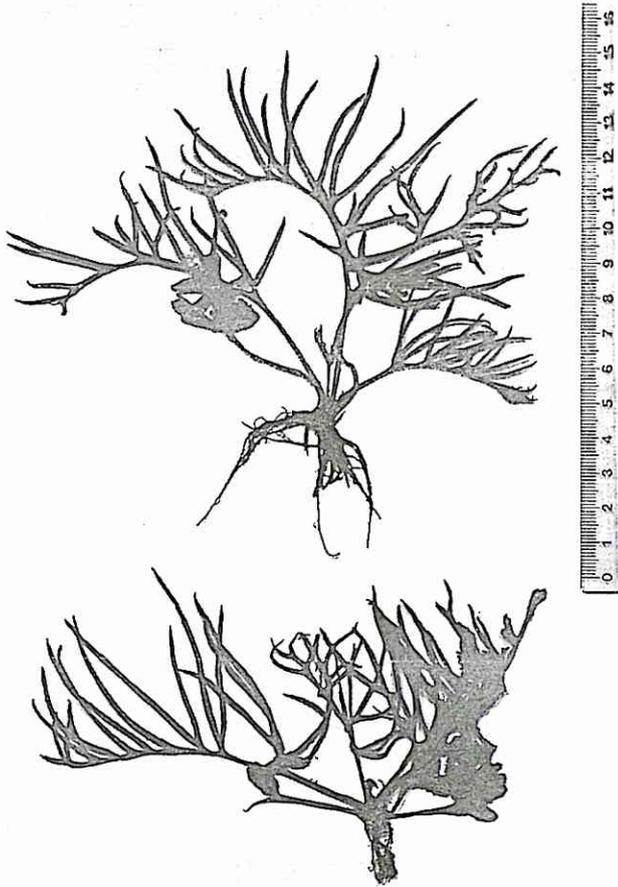


図 1 ミズワラビの全形

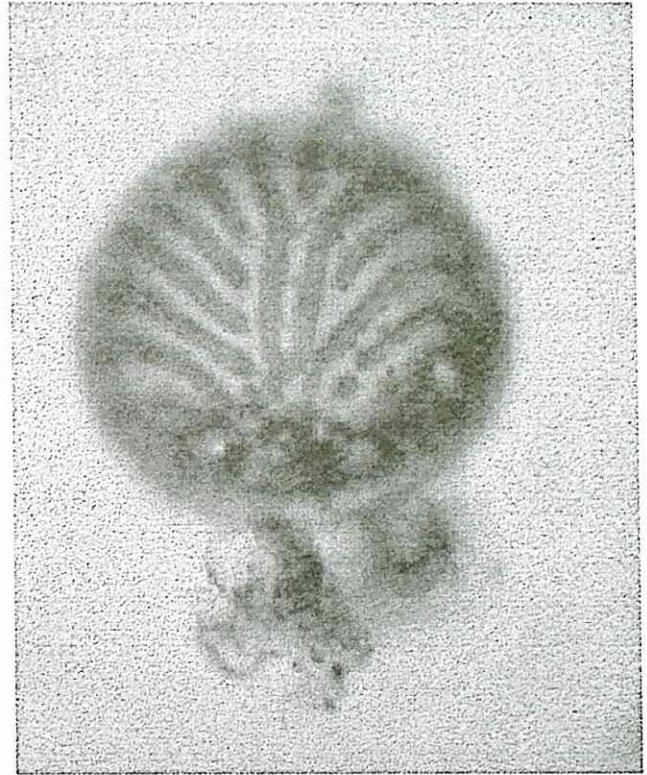


写真2 ミズワラビ孢子 径100~112 μ m 表面に複雑な文様がある

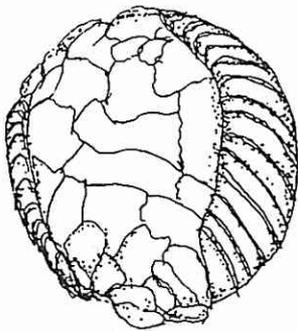


図 3 同 上

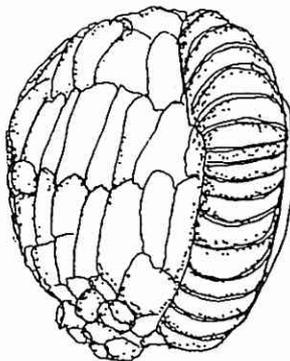


図 2 ミズワラビ孢子囊 径480~530 μ m 中に32個の孢子

文 献

- 1) 倉田悟・中池敏之(1979), 日本のシダ植物図鑑 第1巻、306-310
- 2) 登坂裕一(1988), ミズワラビ、新潟県植物分布図集 第9集、11-12.
- 3) 池上義信・石沢進(1994), 新潟県植物分布資料(14)、新潟県植物分布図集 第15集、123.
- 4) 池上義信・石沢進(1997), 新潟県植物分布資料(17)、新潟県植物分布図集 第18集、93.
- 5) 牧野恭次 (2000), 新潟県の羊歯植物誌、82
- 6) 鳥屋野瀉植物調査会(1988), 鳥屋野瀉植物調査報告書、4~5.
- 7) 高橋務(1999), ミズワラビ、加茂生物同好会会報、No. 5.
- 8) 杉本守・佐藤卓・鳴橋直弘(2000), 富山県ではびこるミズワラビ、植物地理・分類研究 Vol. 48. (1), 93-96.